

「中間まとめ」に関する地域説明会 東根会場における質疑応答の概要

< Q : 会場からの質問・意見

A : 検討委員会委員長、教育次長、高校改革推進室長の発言 >

Q : 再編は、学ぶ者の絶対数が減少し、現在のような教育ができなくなるということからのもので、対応は当然のことと思う。ところが、一部には考え方がかけ離れた次元での意見もあり、いろんな問題を生じていると思う。

地域にとって、高校などの施設があれば地域の活性化につながっていくし、なくなれば地域が衰退することになる。決める立場の人は、いらぬ言葉に惑わされずに、本来の主旨に基づいて決めたほうがいいと思う。

A : 検討委員会では4つの高校を視察した。授業も参観したが、どこの生徒も一生懸命で、それぞれ歴史のある高校である。

最初に考えたのは、今ある高校を念頭に置くと、検討委員会が与えられた課題からはずれてしまうのではないかということであった。

そこで、今の4校のことは考えずに、この北村山地区の地域の特性と、生徒の数の減少を踏まえ、この北村山地区でどういう人材が望まれているのかを議論した。

次に、どういう教育内容や活動が必要か、ということを検討した。

また、高校は、1学年1学級や2学級の規模では、中学3年生が部活動をやりたいから入学しても、野球部もない、合唱部もないということになる。生物の授業を物理の先生が教えることなども起こり、生徒にとっても、先生にとっても不幸なことになる。そうすると、高校には適正な規模があり、ここではおおよそ3校が学校の規模としていいのではないかということになった。

4つの高校には、それぞれの歴史があり、これから、その高校をどう活用し、どう残していくのかなどについては、検討委員会の答申を受け、県教育委員会で検討していくものと思っている。

Q : 北村山地区には4校あり、北村山高校の校舎は新しいが、その他の高校はそれぞれ年数が経っていると思う。今回の再編に併せ、新しい校舎の建築や、用地などの検討はなされているのか。

A : 4校の中には、相当年数の経っている校舎がある。北村山地区だけでなく、全県を見渡し、教育委員会の総務課で検討している。耐震補強を含め、全体の方針の中で進めることになる。

Q : 先程、北村山地区の中学校卒業予定者数の減少の話があり、半数以上の生徒は北村山地区以外に進学している話があった。生徒数は減っても、魅力ある高校をつくれば、逆に北村山地区の高校に進学してくれると思っている。再編において、魅力あるいい学校をつくってもらいたい。

ここには3市1町があり、それぞれ人口の動向がある。人口は子どもの人数にも影響するが、今後の子どもの各市町における人数の推移をどの程度考慮するのか。

A：高校の再編は全県で進められている。意見の中には、北村山地区を越えた再編の検討の要望もあったが、困難な部分もあり、各地区での検討で進んでいる。

北村山地区は、中学校卒業生数が今後約800人に減少するという話があったが、4割が東南村山地区に進学しており、北村山地区に400人が残らないことになると、14学級も危なくなるという現状の中での検討になっている。

例えば、普通科の高校は、山形市方面に進学しなくてもすすむ高校をつくってほしいという要望が多かったため、そのことは、答申の中に盛り込んでいきたいと考えている。

グローバルということで、どんどん世界にでていく。その時に重要なのは、地元に戻ってくる。世界に行ったら、日本に戻ってくるのが大切である。

西澤潤一先生は、グローバルだけでなく、ローカルも大切で、グローバルな教育がこれからは重要だといっている。東南村山地区に進学した生徒も、心は地元にあるような教育がこれからは必要であると思う。

4つの高校を視察したが、生徒が輝き、目が純粹でキラキラしている。入学した生徒はみな満足していると思う。例えば、村山農業高校はバイオテクノロジーの最先端を扱っている。そういうことを、保護者にも、地域の人にも見てもらえば、地域の高校の良さが分かってもらえると思う。

A：地域にこだわらないでという意見があったが、地域の4校の出身地の割合は、7割以上が地元である。そのことを踏まえ、他地区の高校を視野に入れながらも、北村山地区に限って検討を進めている。

市町村の推移に関して、市町村合併までは対応できない。

平成16年3月には、県全体で中学生が14,000人ほどいたが、平成26年には11,000人ほどになり、約3,000人少なくなるという中で再編整備を進めており、全体として55学級程度を公立高校で削減する予定である。

55学級というのは、1学年あたり5学級規模の学校で11校に相当し、そのくらいの数の生徒が少なくなる。その中で今進めているのは、酒田市内の再編と、この北村山地区である。来年度は西村山地区と西置賜地区の再編を検討する委員会を立ち上げる予定である。

Q：北村山地区の4校を、3校や2校にする時に、人口や子どもたちの数の動向などが、再編の具体案の検討にあたって、どれだけ参考にし、どの程度重要視されるのか。

A：人口は、直接参考にはしない。「中間まとめ」の説明にもあったが、この地域にどのような教育をする高校が、どれほど必要なのかを検討してきた。どこにどれだけの高校をとという直接的な検討ではない。

ただ、中学校の生徒がどのように進路を決めていくかが大切になる。

今、使用している資料は、現在の小学校1年生から中学校3年生までは学校基本調査の数字に基づき、それ以降は市町村の教育委員会に協力していただいた出生数からの数字で、平成32、33年の数字まで把握している。それに基づいて、北村山地区の生徒は何人ということを出して、再編整備の資料としている。

それは、この地区に限らず、他の学区もすべて同じである。そういう数字を見ながら、全県の再編整備を進めている。

Q：下の子どもが小学校6年生であるが、「さんさんプラン」の中で大切に育ててもらい、平成23年度には中学校を卒業し高校に入学する。山形県の子育てに対する取組の中で、高校ではどのような動きがあるのか。

A：山形県の「さんさんプラン」は義務教育で成果をあげ、全国的にも注目されたことはよく承知している。

高校でも、1学級30人ぐらいにして学級の数を増やしたらどうかという意見もあった。しかし、国では1学級40人ということが決まっていて、それに対して、教員の数も決まっている。

問題なのは、クラスの数ではなく、1学年何名ぐらいか、ということである。意見をいただいた。高校として活力があるためには、1学年あたり200名から250名ぐらいの規模が必要である。そうすれば、部活動でも、その他の活動でも受験勉強でも、さまざまな意味で、適正な規模であるということで、「中間まとめ」のように考えている。

A：小学校で実施している「さんさんプラン」を、どのように中学校につなげていくかということに取組んでおり、その先の高校生でどうか、という議論はなされていない。

「さんさんプラン」がもたらした効果はたくさんあると思うが、現在はその効果を検証して、再構築していく段階になっている。その議論を踏まえて、中学校でどう実施していくのかということであり、高校は、その先の議論になると思う。

A：高校生の発達段階に合わせた教育が大切と思っている。「さんさんプラン」の成果はあるが、高校生の発達段階に合わせ、国の「標準法」の中で、高校の1学級の人数は40人と決まっており、その人数で再編整備を考えている。

高校では1学級40人でも、常に40人ではなく、授業によっては、選択科目があったり、専門高校になると、グループ学習の課題研究など、少ない人数の授業がある。いつも40人ではないことを、理解をいただきたい。

Q：山形県の高校では、オリンピック選手を育成するようなスポーツ面での活躍はあるが、例えば、目標としてノーベル賞をとれるような人材の育成をというような、山形県の学習面での具体的な取組は高校ではどうなっているのか。

A：スポーツ面以外のその他の取組については、小学校、中学校を含め、高校でもさま

ざまな事業を展開しており、子どもたちの力を伸ばすための取組を実施している。

例えば、英語力向上や医学部への進学のための取組などの事業を展開しているが、ノーベル賞などまで意識したものではない。

A：以前は、ある学校に入学するとその上へは進学できないということがあったが、今はそれがなくなり、あらゆる高校から進学の道が開けており、医学部でも文系からも進学できる。そういう時代なので、いろんな道が開けていると感じている。

Q：北村山地区の再編の話があり、今後は西村山地区の再編の話がでていますが、東南村山地区の検討はどういう予定になっているのか。

A：県内のすべての地域の生徒数が同じように減少するわけではない。減少の様子を見ながら再編を検討することになるが、平成 26 年度までの、第 5 次山形県教育振興計画期間中、東南村山地区については、学級減はあるが、再編の検討の予定はない。

Q：予定はないということだが、山形市は県都で一番大きく、高校がたくさんあって、私立高校もある。北村山地区、西村山地区の検討の中で、北村山地区から半分の生徒が進学する一番大きなウエイトを占めているのは、東南村山地区だと思う。

そういう意味で、26 年度まで再編の検討がないということではなく、この少子化の実態を踏まえ、取組んでほしいし、再考してほしい。

A：山形市内や東南村山地区は、相当の生徒数になっており、単純に学校数で比較すると足りないくらいである。私立高校があるので単純にはならないが、東南村地区に学校数が多いから、学校数を減らさなければならないということにはならないと思う。

再編については、すべての学校を対象に考えている。全部対象にしながら再編を検討していくが、山形市内の高校を減らせば北村山地区に残るということではないと思う。

山形市内の高校へは、相当の希望があるということを踏まえて再編整備を進めている。

Q：魅力ある学校をつくるという観点からすれば、山形東高校、山形西高校、山形南高校、山形北高校などは、魅力ある学校だから集まっている。そういう魅力ある学校をこの北村山地区につくるということだが、魅力ある学校といっても見えない部分がある。具体的なものが見えないので確認したかった。

A：普通科高校の充実は、たくさんの方から意見があったので、答申の中に入れていたいと思っている。

A：「中間まとめ」では、3校の配置が望ましいが、2校の配置も考えられるということになった。どこをどうするのかではなく、どうあればいいのかを検討していただきたい

た。

具体的にそれぞれの学校をどうするのかということについては、別の検討が必要になってくると考えている。

普通科の進学を充実させた高校をつくってほしいということは、多くの意見としてあったので、報告書に盛り込まれることになると思う。

以 上